

紹介

伊藤仁齋の學問と教育

加藤 仁 平 著

加藤仁平氏が、内藤・狩野・高瀬三博士に續いて古義堂現存の資料探訪に着手せられたのが昭和の初年であり「伊藤仁齋に於ける古義思想の發展とその上に立つ教育思想」(『高瀬博士還暦記』)「伊藤東涯に於ける仁齋學の發展」(『三宅博士古稀祝賀論文集』)の二論文を學界に贈られた。由來十數年を経て今日儼然九百餘頁の大著『伊藤仁齋の學問と教育』として、積年倦むことを知らなかつた研讀と苦心とを結晶せしめられた。讀者の一人として、開拓者の誰れしもが經驗したであらう所のあの困難を克服せられ、後學者の者に柄乎たる標識を與へられた著者に滿腔の感謝を捧げ度い。

本書は題名が示すよりも、より包括的に意志のもとに書かれたものである。「古義堂即堀川塾の教育史的研究」と云ふ副題がつけられてゐる如く、正に古義堂の全歴史を對象としてゐるのである。即仁齋に起筆して七代二百數十年に亙り、明治に至るまでの直系に止らず、資料が導き得る限りの傍系を尋ね盡して、仁齋の影響の及んだ末々までも追求せずんば息まざるの概がある。

以下章を追ふて概要の紹介を試みるであらう。「第一章」序説は日本近世教育史上に於ける仁齋等と私塾としての古義堂を概観し學問と教育がそこから出發する地盤を示された。「第二章」一人の偉大なる學者の中に大轉換を含みつゝ、發展した學問即朱子學離脱古義學成立に至るまでの諸相を精密に考證せられた此章は、確かに後進者のよるべとなるべき雄篇である。「第三章」『語孟字義』に據つて古義學の要旨を述べ、「童子問」に據つて教育思想を説く。「第四章」古義堂教育の具體相を詳述し、特に朝廷の教學に參與して、盡忠の誠を致した仁齋の一面を、主として「詩集」を資料にして強調せられた。「第五章」門人と諸學派への影響を取上げられた。「第六章」東涯に移り、古義學の紹述過程が、精密に考證せられ、之又後學の憑據すべき力作である。「第七章」古義堂の夥しい刊行物の出版事業に就いてあるが、之を單純に東涯の功績なりと片付けずに、該事業に於ける師弟父子協同の熱風を前面に出されたが、かゝる出版方法の中に尊い教育操作を見出さんとした著者の意圖に深く敬服しなければならぬ。「第八章」東涯の門人と家庭教育等に就いて。「第九節」仁齋第二子梅宇の徳山・福山に於ける活動、特に福山を機縁としての對朝鮮關係は興味ある問題である。「第十节」高槻藩に於ける第三子介亭、こゝでは特に介亭の孫娘節婦信を通して婦道に觸れられた。「第十一节」第四子竹里の江戸及び久留米藩に於ける家學の倡道。「第十三章」末子蘭嶼の紀州藩、及び古義堂の後見としての功績に就いてである。是等東涯以

下の五子は所謂「堀川の五藏先生」として喧傳せられたが、あまり知られることの少かつた介亭竹里に關して貴重な記述を得たことは挽はしき限りである。(第十三章)東瀛の子、第三代東所の家學修成の功績に就いて、(第十四章)第四代東里——(第十五章)五代東峯と、時代の上からは既に儒教の衰退が來てをり、異學禁があつたにしても古義堂教育に衰へを見せなかつた有様が敘述せられてゐる。(第十六章)東所の第五子、長岡藩に祿仕した東岸を取上げられた。之は特に附録せられた「伊藤家々訓大略」の著者として重要な人である。(第十七章)此章を讀んで、暮來から明治へかけて最も大きな轉換期にまたがり、儒教の運命が舊物破壞蔑視の波に翻弄せられた時に、猶古義堂は閉鎖されず、毅然として存続したのは西園寺公をも教導した第六代輔齋の力であることが痛感せられる。(第十八章)第七代琢齋の後見として、古義堂資料の全き保存に盡精せられた梅塘頼也が、又著者の根本資料を基礎とする研究に大いなる啓導を興へられたことに對し美しき感謝の意がこめられてゐる。本書が同翁にデヴィケートされた所以である。

(第十九章)結論。以上本文の他に附録として、第一「伊藤家系譜」第二「古學先生手帳」、第三「家訓大略」、第四「應歴」「伊藤家年表」がつけられてゐるが、何れも未刊の資料として貴重なものである。わけても第二は元祿年中に仁齋の江州水口藩在中留守居の予達に宛てた手紙十一通を集録したもので、家庭教育の實際を物語る好資料である。甚だ讀みにくいものであるが、中村先生の校閲を経て活字に移された事は慶賀に堪へぬ。第三は(第十六章)に指摘し

た如く、長岡なる東岸弘充が、自家の養子、宗家の姪第六代仁齋、及び和歌山伊藤家の姪に對して、古義堂精神とも云ふべきもの。家學・家風を傳へんとしたもので、それが古義堂内部の事情に基いて如何に傳統化されてゐるかを知らる上に不可缺の資料である。

×

以上甚だ蕪雜な紹介を終つたが、茲に「教育史的研究」と副題された本書を契機として反省すべきは教育史が如何なる方法に立脚し、如何なる方向に向ふべきかの問題であらうか。教育史を狹義に解すれば、人類の自覺的な教育活動のみを自己の對象として攝取し、之を現代教育に復活せしめんとする所に研究目的を認めてい、と考へられる。併しながら修身の教材の如く教訓的事實のみを抽象し、それが無媒介に現代に復活し得るとは考へられない。こゝにより廣闊な「歴史が教育すること云つたデイルタイの言葉を想起せざるを得ないのである。この故に教育史的事實が抽象されないで、かへつて歴史的事實のうちに攝せられる形に於て、即歴史的理解を媒介として教育精神の復活と云ふことが、大きな意味をもつてはなからうか。この見地から日本近世教育史上に於ける仁齋の位置を見究める上にも序説「政治の命する所と社會の要請と、仁齋の主張とを對決せしめ、そこに階級意識を以て人間の高貴性を蹂躪すること多くあつた封建社會に胎動した一つの人間愛の精神(これこそ純粹な教育精神の中核をなすものでなくてはならない)を見出すならば、近世儒教の一つの意義が生々と蘇みがへるのではなからうか。又(第五章)他學派への影響であるが、

仁齋が如何に獨創的精神に燃えながら學界を指導し、讀香兩論の渦を卷渦しつゝ、日本儒教に學的諸歸關を惹起し、古義學に附隨する復古精神や實證主義的精神が、同學派・異學派に如何に大きな影響を與へ、博物學・復古醫學・歴史・梵文等の研究を進展せしめる上に如何に重要な役割を果たしたか、より重大な觀點ではなかつたらうか。又(第十三章)以下、東所より後の學問と教育の敘述方法に就いてあるが、それは前期に比して可成の變質が來てゐる筈であり、それを歴史的背景の推移との相關性に於て考へられることの中に、學問が社會的に生きるか死ぬかの蹊が預けられてゐるやうに考へられるのである。

以上甚だ藩越な言辭を弄し、自己の立場を以て付度を恣しいまゝにした罪は消ゆべくもないが、ひとへに著者の寛容を冀ふ次第である。その研究領域の大部分は未だ何人も着手しなかつた未開の原野であり、十數年排作整理の勞を思へば瑕瑾の如きは問ふを要しない。正確な實證的礎石の一個と雖も後進者が安心して踏まへ得る據點たらざるはない。勿論著者を驅つてこれ程の大勞作を完成せしめたものは、單なる理性のみの仕業ではなく、大いなる教育愛・古義堂への深き思索・著者の研讀信奉淺からざる報徳の教へ等から流れ出づる情熱の然らしむる所であらう。全篇氣魂に充ちた文字は、讀む者に深い感動を與へずんばおかぬ。卷を覆ふて、仁齋に於て學問と教育の相即し融合した眞の姿を感得せざるを得ない。(菊版本文八三三頁、附録七六頁、コロッタイフ寫眞六

葉、東京目黒書店發行、定價九圓)(龜井伸明)

中世南島通交貿易史の研究

小葉 田 淳著

著者が日支中世貿易史に關して令名高く、續々として精細な新研究を發表されつゝあるは世の識る所である。本書は斯の廣泛な研究領域の中、主として琉球を擇び、これと日本本土、明、南海との通交貿易史について纏上げられたものである。従つて單に書題より連想される如き、既發表の論文集の様なものではなく、題目の配列については篇章節等に分けられて組織を持ち、試論的といはむよりは大成されたものとしての意味を有してゐる。尤も其の中には既に世に問はれた論稿も少くはないが、それとても多少の改訂が加へられて本書全體の構想の中に組込まれて居り、他は新たに起稿されたもので、量からいへば全體の三分の二に及んでゐる。

著者の態度には凡ゆる問題に就いて事實を可能なるだけ多く搜り、これを興奮に援用せむとする實證的意圖が看取され眞摯な學的探究心と倦まざる努力とは敬服に堪へざる所である。中世南島貿易史の史料的研究は著者のそれに悉きたる感をさへ懐かしめるものがある。

たい一見して種々の事實があまりにもゆたかに擧げられてゐたのに讀者をして理解を困難ならしめ、従つて結論的なもの、抽出が容易でないといふ感を起さしめ易い。然しながらそれは本書を